

金丈けの品物渡した上に。命まで添え物にするか。さア夫れと同なし事ちや。向ふは藝と愛嬌が賣り物ぢや。此方は品物買ふた丈けの金拂ふてやるのに、何恩に着せる事が有るかい。コラ。人に小生意氣な意見でも仕様と思ふなら、ちつとは世間の學問もしときやがれ、藝者末社と云ふ者はナ。家に依たら冬でも座蒲團無しや。藤蔭の上へ直かに坐て、火鉢には手も出しやへんわ。夏は夏で暑苦しい重ね着して、やれ弾けの、それ唄えの、苦しい勤め酒も飲まにや成らぬ。オイ。夫れでも何ふや花代唯取てよる様に思ふか。命まで出さなんだら畜生見たいに云ふて遣らんらんか。蕪ッどこまで俺しに逆らやがんね……エーイツ。エイツ。エイツ。』

『アツ痛ツ。モシそんな貴方、人の横面を、アツ痛ツ。若旦那……アツ痛ツ。』

『汝れ等にも痛いと思ふ土性根が有るのかい。ヘン、手で撲つたるのは勿態ない。コラ有難ふ思ふとけ、大阪五花街を踏み鳴らした、此雪駄で遣つたるワ。ウーン、ウーン。ウーン。』

『ア痛ツ。ア痛ツ。ア痛ツ。モシ若旦那そりや何と云ふ事を、アツ痛ツタタ。ア、これ若し。假例何の様に叩かれましても、私は關ひませんが、若しも顔に疵でも附きましたら。ア、彼の播磨屋の番頭は顔に疵がある。ひよつよ他處で喧嘩でもしたんや無いかと、世間の……世間の……ブツ、わ若旦那。貴方ア私の額を……』

『フン何ぢや其面ア。オ、割つたつた。夫れが何ふしたんぢやい。』

『エーもふ……』

『オイ……』。刀の柄に手エ掛けたな。斬る氣か、面白い、斬られたる、さア斬れ、早ふ斬らんか
い。』

『わ、若旦那、め、滅想も無い、斬るやなんのと、大それた事を……』

『啞吐け。そんなら何んで刀に手エ掛けたんぢやい。イヤ俺しや斬つて貰ふね。サア斬て呉れ。斬りやがれ。斬らんかい。』

『ア、もし、危険い。そんな無理を。アツ危険い、イエこれは、お葬式の歸りやさかい、持てる刀だすがナ。アツこれもし、危険いと云ふたら……』

『ウワッ……番頭斬つたなツ。ヒツ、ヒツ。人殺しやツ。……』

『コレもうし。大きな聲で何を云ひなはんね。四邊には米喰ふ虫が住むますがな。云ふて良え事と悪い事がおます。若しも人に聴こえたら……』

『ヒツ。人……』

『エ、もう、靜かにしなはんかいな。何んで私しが貴方はんを、どう……して……斬……る……ヒヤッ失敗ふた……(鐘の音)……ア、お怪我をさせまいと、刀を引かふとした機みに、柄が走つて豪いこととして仕舞ふた。……併し茲まで性根の腐たお方。生きてお在で遊ばしても、どふせ末始付は